

ディスカッションへの基本視点

菅野正純(日本労働者協同組合連合会)

中川協同総研理事長のごあいさつ、磯野学長のごあいさつ、それから堂本知事のごあいさつと最初から本質的な問題提起で始まりました。そして大内力先生には、人間の労働の本質に立ち返りながら社会の仕組みが変わる時に来ているのではないか、という問題提起をいただき、堀内光子ILO駐日代表にはグローバル化の中での市民社会組織

の台頭、そしてまた、いま求められている人間的な労働＝ディーセント・ワークの関連の中で協同組合の役割について示唆していただきました。協同集会を重ねてきて、今年、九州集会での盛況もあわせ、本当にこのように本格的な集会が実現できたと実感しております。これは、協同労働の運動が大きく展開をし始めたということの現われではないか、と考えております。

これから、これらのごあいさつとご講演を受けまして、明日の分科会に橋渡しをするという意味で、「生命・労働・地域の再生を担う新しい力」をどこに求めていくのか、について議論をしていきたいと思っております。

はじめにコーディネーターから基本的な視点について提案をさせていただきます。

第一には、「協同」一人と人のつながりの中で、すべての人がかけがえのない役割と仕事を得て自分らしく生きていくこと一が、人間らしく生きていく上での根本条件であることに多くの人気がつきはじめたのではないか、ということです。これは「価値」「文化」「生き方」に関わる変化であります。とくに今日、千葉大学の宮本みち子先生も近





刊の著書で述べられていますように、若者たちが人と人との関係の中で自らの役割を選び取っていくための社会的支援が求められています。

第二に、従来型の企業が人々に就労機会を提供できなくなる中で、人々が自ら仕事をおこしていく「協同労働」の願いと実践が広がりはじめた、ということです。人間の労働が求められる領域は「生命・生活・人生」と、それが営まれる地域を支え豊かにする仕事であり、そこでは協同労働こそがふさわしい。協同労働の広がりや、本当に必要なものをつくりあい、分かち合う、新しい経済の成長を告げるものであります。

第三には新しい公共性＝市民的公共性が必要不可欠なものとして本格的に登場しはじめた、ということです。「すべての人が地域で当たり前暮らし」ことが、新たな「福祉」の概念となり、すべての人が人と地域に役立つ仕事を通じて働き続けることを促進し、地域の経済社会を再生していくことが公共政策の中心課題となりつつあります。ましてや地域経済の再生ということになれば、これらは市民が主体にならなければ実

現できません。堂本知事はNPO立県ということでやっています。そのようなNPOと共に協同労働で事業を起こしていくコミュニティビジネスの領域が制度的にも保障され、確立していかなければなりません。コミュニティ再生を視野に、事業・経営に本格的に挑戦する新しい市民社会組織が成長し、NPOと協同組合、コミュニティビジネスが多様に結び合い、相乗効果を発揮していくことが求められています。

このような問題提起をさせていただいた上で、ディスカッションに入っていきたいと思えます。

